



# Let's 楽しもう！盛り上がる 読上げ算



今月の競技大会に向けて教室では「願ひましては～」で始まる読上げ算練習を実施中。待ってましたあ～、得意の読上げ算だあ！と気合を入れて臨む生徒もいれば、中には始めて経験するので少し戸惑った表情の生徒も…。それでも各生徒はそれなりに楽しみながら取り組んでいる様子が伺えます。

練習しているのは、ソロバンで計算する「読上げ算」、ソロバンを使わずに暗算で計算する「読上げ暗算」、数字を英語で読む「英語読み上げ算」の3種目。生徒により得意分野が違うため、種目によって結果が大きく左右されます。

さて、読上げ算は数字を足したり引いたり…を繰り返していくため、見取り算との共通点が多くある一方で、異なる点もいくつかあります。

読上げ算を経験した方はピンとくるはずですが、とにかく集中力+注意力が求められるのが特徴的。もしも計算途中で間違ってしまったら、すぐに修正できる場合は良いのですが、ココで「え～と…」などと躓いてしまうと、その間にも読み手(問題)は待ってくれずに次々に進んでいくため途中でギブアップとなってしまいます。

	見取り算	読上げ算
問題	目からインプット	耳からインプット
計算のやり直し	容易にできる	かなり困難
計算スピード	自分の好きなペース	読み手のペース
必要なこと	アタマの集中力	全身全霊の集中力
よくあるミス(共通)	◆足し算と引き算の混同	◆ケタの入れ間違い
正解だったとき	普通にうれしい	踊りたくなる位うれしい

少し大きさに聞こえるかもしれませんが、読上げ算を攻略するためには、耳はモチロンですがアタマ、指先、視覚をはじめカラダ中の神経をひとつにして取り組む姿勢が不可欠です。自分の感覚からすると、日常生活の中ではあまり経験することのないタイプの能力が要求され、一瞬も気が抜けないスタンバイ状態が数秒から数十秒のあいだ、続くのが読上げ算の醍醐味ですし、ほんの少しでも気を抜いたら直ちにジ・エンド…。ふと思いついたのですが、もしかするとサーカスの綱渡りのときの緊張感に近いのかも知れません(モチロンやったことはありませんが)。

また正解できるか否かは出題形式により大きく変化します。◆ケタ揃い(例えばすべて5ケタばかりの問題) ◆少ない口数(5口) ◆加算(引き算はなく足し算のみ) ◆ゆったりスピードで読む...場合は多くの生徒が正解できますが、この反対に◇ケタ違い(例えば4ケタ～7ケタ) ◇多い口数(10口) ◇加減算(足したり、引いたり) ◇スピードアップ...になると正解率は途端にガタンと落ちてしまいます。とくにケタ違いの場合は多くの生徒にとって難易度が上がる傾向にあり、最初の数字を聞いた瞬間にそれが〇百万～なのか、〇十万～なのか、〇万～なのか、〇千～なのかを聞き取ると同時にそろばんの珠に変換していく作業が必要となるため、いずれのけた数で読まれても瞬時に対応できるように終始、臨戦モードであり続けることが求められます。

このように色々な意味でハードルが高い点があるのは否めませんが、他方でみんなと同じ問題に挑戦し、その場ですぐに結果が出るので生徒はゲーム感覚で楽しみながら参加でき、教室ではとても人気が高いのも事実。普段の練習とはちがって先生と生徒、あるいは生徒同士の間で多くの言葉のやり取りが交わされ、とにかくその場の雰囲気はパァ～と盛り上がります。おまけに、専門的なことはあまり分かりませんが、自分でペースをコントロールしながら計算を進めるのではなく、こちらの状況などお構いなしに次々に進んでいく読上げ算のようなトレーニングは、脳のいろんな分野を成長させるのにとっても役立つような気がします。真剣に集中して練習を続けると、心身ともにめっちゃくちゃに疲れます。教室ではこれからも定期的に読上げ算を取り上げていく予定ですので、参加資格のある生徒は積極的に参加しながら自分の埋もれている潜在能力を引っ張りあげていきましょう。

\*\*\* 訃報 \*\*\*

10月17日、当そろばん教室の創業者である関根光雄が療養中の病院にて永眠しました(90歳)。昭和31年(1956年)22歳のとき、生徒11名を必死に集めて牛久保町常盤の八百屋さんの2階を借りて、そろばん教室をスタート。その後、試行錯誤を繰り返しながらも、昭和後半～平成前半のピーク時には時代の後押しもあり、3か所の教室で総生徒数は500名にも達していたようです。

‘20年2月までは教室で指導に当たっていましたので、いま在籍中の生徒のなかには知っている人もいることでしょう。いまごろ天国で好物のどら焼きと栗を食べながらソロバン珠を弾いているのかもしれない。生前はお世話になり、まことに有り難うございました。



‘20年2月 孫の結婚式にて